

半時の間毎にともと花とへきりを吹べし、少しにても乾くときは落るなり、一日一夜にして發くなり、泰崎氏云、西洋人某、崎陽にて冬月西瓜を作らんとて、盡日太陽の當る地に穴を堀り、其中に西瓜の苗を植ゑ、培養力を盡し、上に硝子の障子を施し、其上へ油紙一葉隔て養ひけり、寒月に至る頃、果して一瓜を結び、大きさも十分、皮の色深緑色なりければ、某大びに喜び、日をトして人を招き、右の西瓜を出し、これを食せんとて割りたるに、外皮とは大びにたがひて、瓤は白色なり、味ひ更になしとかや、人力にて太陽の光力をからざれば、果も花も十分の香色はなし、唐花唯一時目を喜ばするのみなり、又翠藍桂川先生の説に、西洋にてガラスボイスといふものありて、硝子を以て果木を覆ひ養ひて、冬月葡萄を漂流の人々に食はせし事ありと。

〔草木奇品家雅見上〕朝比奈は東都四谷新邸の人なり、永島先生の門に入て好人の聞あり、奇品を愛すること衆に殊なり、寒夜に不寐して草木の寒を想像、窖さちひやうひやうを造て舶來の種を養今之唐窖是なり、但唐窖其頃は床下に造と云、今之法とすと云、始て草木の性に隨て、寒暑陰陽の護持を別ち、及百兩金の葉を洗てこむしを除且當歲に花芽を著ることを考傳、萬種培養、斯人最拔群なりと云、

〔草木育種上〕上登盆の事附り 養花插瓶の事

按に盆栽は土乾ず濕ず、よく下へ水の抜るを第一とす、陶盤はんにても、又花盆はなぼんにても、水抜の穴肝要なり、其穴は漏斗の如少も水のたまりなきをよしとす、穴の所内へ引込んだるは廻りへ水滯て惡し、穴の所低がよし、扱穴を覆に、何の瓷器にても、だき、其まゝふせて穴を覆べし、文蛤などは鉢によりて水抜惡事あり、花鏡に建蘭を植る法に云用盆先瓦片填底後以煉過土覆上と、これ妙法なり、蘭百兩金などを鉢へ植るには盆の底の穴を大きくして、其上を覆に、赤土の黄めにて、かたまたる土をあらくだきふるひて、其篩に残たる粗土を入れ植れば、水よく抜て根腐事なし、物によりて植る土へ、合肥を切ませたるもよし、總て植る法は、まづ陶盤を下に置、植木の根元を以